

夢追い人列伝

その五 「中村幸男伝」

初めに

平成23年10月の「おいでませ！山口国体」、バスケットボール競技少年男子の会場は周南市の「キリンビバレッジ周南総合スポーツセンター」だった。競技初日、館内の関係者控え室に入るとテーブルの上に菓子折が置かれている。「ご自由にお召し上がりください」とある脇に「中村幸男より」と添えられていた。国体開幕を目前に他界を余儀なくされた県バスケットボール協会前理事長の御家族からの心遣いだった。

本県バスケット競技における先覚者の功労を叙す「夢追い人列伝」シリーズ、五人目は、昭和60年から平成時代にかけての県協会を理事長（現専務理事）、副会長として果敢にリードした故・中村幸男氏である。

氏は実業団連盟の出身で、県協会第6代理事を務め日本リーグや各種全国大会の招致、運営に敏腕を振るい協会牽引に精魂を傾けるとともに、一般クラブ、ママさん、ミニバスなど全県的な競技の活性化と振興に尽力してやまなかった。理事長退任後も副会長として協会の屋台骨を支えていた氏を病魔が襲う。思いがけぬ訃報に関係者は一様に悲しみに暮れた。享年74歳。周囲から「ユキさん」の愛称で広く親しまれ、協会史に大きな足跡を残した中村幸男氏の功績を紹介する。

中村 幸男（なかむら ゆきお）

昭和13年6月生まれ／平成23年6月逝去 自宅：旧新南陽市
徳山商工高等学校機械科卒業
武田薬品工業(株)勤務（昭和32年4月～平成9年3月）
（一般社団法人）山口県バスケットボール協会元副会長



1 武田薬品

新入生の中村幸男氏が新南陽の富田中学校の校門をくぐったのは昭和26年の春、落ち着きを取り戻しつつあるとは言え、街にも学校にも戦後の騒然たる空気がまだ色濃く残っている時期であった。その中でたまたまバスケットボールを手にした少年は、進学した徳山商工高校でも競技に打ち込んだ。名将・白松寿人監督のもとめきめき力をつけ、ポイントゲッターとして同校を地区大会優勝に導くなどコート狭しと活躍したが、全国大会には一步届かず高校3年次のインターハイ出場校はお隣の徳山高校だった。

一もはや戦後ではない。『経済白書』がそう宣言したのは昭和31年、その翌年に中村氏は高校を卒業、武田薬品工業(株)に入社し光工場に勤務する。化学薬品の製造ラインに従事しながら、社内のバスケットチームでフォワードプレイヤーとして活躍した。戦後すぐの時期に実業団の強豪として脚光を浴びた武田薬品ながら、昭和30年代には協和発酵や帝人岩国チームが取って代わるようになっていた。やがて新日鐵光、笠戸ドック、東洋曹達などが頭角を現し、武田薬品も一線に復帰してくる。

当時の中村氏を、山口国体に教員チームの補強選手として出場した武田薬品の後輩、絵

堂明生氏はこう語る。

私は、中村さんより二年後に入社しました。私もバスケットをしていたので入部し、弟のように大事に指導してもらいました。光工場での中村さんは「メルさん」の愛称で呼ばれていました。メルさんは、入社後工場に勤めているバスケット愛好者を募り、会社を動かして対外試合に参加出来る体制を作った人物です。

メルさんのバスケットに対する情熱は、高校時代に指導された先生に感銘を受けたからだということでした。バスケットに情熱を込めて向き合う方でした。

こうして、中村氏はチームの中心に立って奮戦する傍ら、昭和37年創設の県実業団バスケット連盟を初め市や県協会の役員として頭角を現し始める。競技の振興への一途な姿勢と物怖じせぬ真率な発言は周囲から支持を集め、やがて氏はその軸足をコートから運営サイドへと移していくようになる。昭和38年の山口国体を終えて環境的な整備が一段落し、県バスケット界も次のステップに移行しようとする時期だった。

やはり武田薬品光工場の後輩で、県実業団バスケット連盟第6代理事長を務めた田中忠男氏は、そのあたりの事情を次のように述べている。

戦後間もない1949・50年(S24・25)と二度の実業団選手権大会出場を果たしている我が武田薬品でしたが、長く暗い低迷の時期が続きました。そんな中、入社間もない中村幸男氏は、当時の総務部長を担ぎ出し、選手の補強、チーム強化に努め部の再興に向けて尽力されました。1959年(S34)頃のことでした。その甲斐あって1964年(S39)と1967年(S42)の第19回・22回の全日本実業団選手権大会に出場を果たしています。

しかし、時を同じくして新日鐵光、笠戸ドックもチーム強化に取り組み、武田薬品の前に立ち上がることになりました。中村氏は、1971年(S46)に開設された武田薬品徳山分工場へ転勤され、再度の全国大会を見ないまま光工場での活動は終わることとなりましたが、次のステージとなる県実業団連盟、中国実業団連盟、県バスケットボール協会での活躍はご承知のとおりです。

—『覚え書き 中村幸男氏を偲んで』～故中村幸男氏の武田薬品時代～から—

2 日本リーグ担当

平成19年2月刊行の『夢を追う』には中村氏の寄稿が載っている。「記念史発刊に寄せて」と題した一文である。

(昭和30年代の県)協会理事は登録チームから1名が代表として出ており、山口国体では理事が運営に携わりました。私自身は救護係を担当し国体運営に参加しました。……その後、昭和60年から12年間、理事長という重責を担当させていただきましたが、私の記憶の中で印象深いのが、昭和55年から日本リーグ事業を担当することになり県内各地において毎年のように日本リーグの誘致開催に努め、山口県での開催は恒例的、普遍的な事業として実施できるようになったことです。これは、県協会が国際大会や日本リーグ等を積極的に開催した永年の実績と運営組織やスタッフの充実を図ってきた賜物と思っているところです。

—『夢を追う』～山口県バスケットボール協会60年のあゆみ～から—

山口国体当時に県協会理事として活躍していた中村氏が徳山市バスケット協会の理事長に就いたのは昭和42年頃であり、また、昭和44年からは県実業団連盟の理事長に就任している。30歳代前半と気鋭の理事長の誕生だった。氏は、昭和44年に南陽町（現周南市）で開催された西日本実業団選手権大会を運営責任者として成功に導く。その翌年には、旧徳山市体育館を会場に県内初となる第4回日本リーグ大会（男子）が開催されている。対戦カードは「日本鉱業対住友金属」であった。日本リーグは、当時の実業団トップチームによる総当たり戦で今日のBリーグの源流をなす。その招致と運営を中心的に担ったのが実連理事長の中村氏で、寄稿文には「昭和55年から日本リーグ事業を担当」したとあるが、その土壌は遡ること十年前からすでに耕されていたのである。

その後も中村氏は、昭和49年「松下電器対三井生命」戦、昭和57年の宇部市での男子「住友金属対日本鋼管」戦、女子「第一勧業銀行対シャンソン化粧品」戦にも実務責任者として臨んでおり、「日本リーグ」は氏の代名詞になった。氏が事業を担当するようになってからは県内のほとんどの市で大会が実施され、中でも糸口となった徳山市（現周南市）での開催は、JBL・WJBL時代を通算して30回近くに上っている。



松下電器vs三井生命（小坂祐三氏提供）

なお、昭和42年に始まった日本リーグの運営主体は、日本実業団連盟から昭和63年に日本協会共催となるなど曲折を経て最終的に日本リーグ機構の所管となったが、中村氏は日本実連主催時の中国地区開催には、日本実連担当者として毎回視察に赴いていた。

3 県協会理事長・中国実業団連盟理事長

県バスケット協会の実質的な業務は理事長が所掌し、事務局とともに実務を所管することになる。3ポイントルールが登場した昭和60年、県協会の再建に大きく貢献した吉村旦理事長の後を受けて中村氏が第6代県協会理事長となり、その後平成8年までの12年間にわたり第一人者として県下バスケット界をリードした。

氏の在任中には中体連初めミニバス連盟、車椅子連盟などほとんどの連盟が出揃い、当時まだ整備されていなかったのはFID連盟くらいのものであった。その中であって理事長の重要な責務の一つに財政状態の健全化を図ることがあり、また、守備範囲が広がっていく協会運営を軌道に乗せる必要にも迫られていた。氏はこうした諸課題に精力的に取り組んだ。各連盟から理事を選出するなど新機軸を打ち出して組織の刷新と活性化を図り、その甲斐あって組織体制も整備が進められ、また、日本リーグ大会の継続的な誘致等により借入金の精算にも目途をつけることができた。

『夢を追う』の区分に従えば、中村氏の理事長在任期間は「充実期・後期」（昭和52～63年）から「発展期・前期」（平成元～10年）の時期に重なる。同書は前者を「各方面から県協会の機能化と実質的な充実が図られるとともに、懸案となっていた県協会の財政的基盤の改善も果たされ、来る発展期に向けて跳躍台となった」時期と総括し、続く発展期の大きなテーマは「バスケットボールを県民スポーツとしてより定着させるとともに、各連盟レベルで全国の最高水準に迫ろうとするところにあつた」と位置づけている。今日見られる各連盟の成果に果たした中村氏の役割はこのほか大きい。

中村氏の在任中の大会招致、開催等は、昭和63年7月の西日本実業団選手権大会、平成4年7月の全国ママさん交歓大会など枚挙にいとまがない。また、氏は昭和58年から平成16年まで20年間余り、中国実業団バスケットボール連盟の理事長として中国地区における競技の普及と振興に辣腕を振るい、さらに、この期間は日本実業団連盟の理事も務め全国的な立場で活躍した。『夢を追う』はこう述べる。

昭和58年、武田薬品の中村幸男氏が県実連の会長就任とともに中国実連の理事長に就き、同時に日本実連の中国地区理事となった。これは山口県としては初めてのことであり、全国的な人材を輩出したという意味でその意義は大きかった。

中村氏の実業団における活躍ぶりをよく知る川武修氏（県協会第8代理事長）によれば、中国実業団連盟は平成8年5月に第1回三地区実業団選手権大会を倉敷市で開催しているが、これは氏が中国実連理事長として四国・九州実業団連盟に働きかけ開催に導いたものである。また、平成11年2月には、全日本実業団競技大会（後の選手権大会）を徳山市に招致し、円滑な運営のもと大会を盛会に導いた。さらに、平成3年から9年にかけては中国地区バスケットボール協会を代表理事長として牽引し、かねて懸案であった協会の財政基盤の修復と確立に寄与している。特筆すべき功績と言えよう。

4 小学生からママさんまで

中村幸男氏の活動範囲は多岐にわたる。

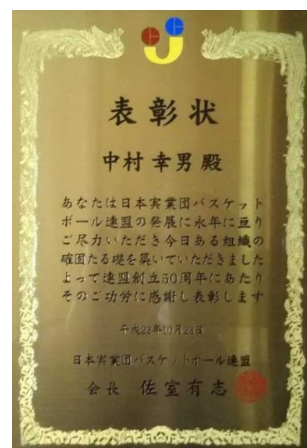
昭和46年の武田薬品徳山分工場転勤と相前後して、氏は一般女子チームの岐陽クラブ立ち上げに深く関わっている。当時、男子は県内の実業団や各地のクラブチームに活躍の場があったが、女子の活動場面は限られていた。そこに手を差し伸べた中の一人が中村氏だった。以後、次々と県内に女子クラブチームが誕生していく。

昭和47年の鹿児島国体成年女子の部には、宇部女子高OG中心の白石クラブに岐陽クラブから5人のメンバーが加わって出場した。残念ながら1回戦で地元チームに惜敗したが、果敢にボールを追う選手の姿に中村氏は目を細めたことだろう。後に監督を引き継いだ岐陽クラブとの直接の縁は昭和57年で一旦幕を引くものの、勝利を目指しつつも和氣藹々とバスケットを楽しむチームカラーは中村氏の思いが色濃くにじんんでいた。

また、氏は昭和54年から市立岐陽中学校の外部コーチを務め、同年の徳山市ミニバスケットチームの旗揚げにも大きく関わっている。さらに、ママさんバスケットでは本県での皮切りとなる昭和57年の徳山ママーズの発足を主導するなど、各方面で競技の拡充と発展に尽力した。往時を「小学生からママさんまでバスケット」時代と評したのは『夢を追う』であるが、まさに中村氏はその時代の先導者であった。

そうした各界での活動歴を雄弁に物語っているのが氏の役職でもある。氏は、中国協会や日本実連などで要職を歴任する中、県協会においても県家庭婦人連盟会長、県ミニ連会長などを務めている。引っ張りだこと言える肩書きの数々であった。

広範多岐にわたる氏の功績に対する表彰も多い。主なものは、平成15年度の中国バスケットボール協会表彰、平成22年度の日本



実業団連盟功労者賞などであるが、同年には山口県から県選奨授与の榮譽に浴している。没後の平成23年10月には、山口県バスケットボール協会特別功労感謝状を授与された。

家庭内でもバスケットはついて回る。大会やイベントの後では決まって「皆のお陰でうまくいった」と嬉しそうに晩酌を楽しむのが常だった。家族旅行はミニ国体観戦後の地元巡りが定番で、国体などで遠方に出かけるとその土地の名産品がお土産になる。奥様は秋田国体の「いぶりがっこ」の味が忘れられないと遠い目をされた。内助の日々は御苦労と背中合わせだったに違いないが、多くの人に支えていただき中身の濃い生涯だったと思うと言われる口ぶりにけれんみはなかった。



平成8年広島国体応援（佐浦益子氏提供）

3人のお子さんほどなたもバスケットに縁がある。長女は、富田中学校バスケット部で同期だった当地のオリンピック選手・原田裕花氏と今でも交友があり、実連の事務局組織が未整備の頃には事務仕事を手伝われたそうである。次女は徳山商業高校で平川登コーチの薫陶を受け、長男は徳山高等専門学校バスケット部でチームの柱となった。それでも中村氏が子女のプレーぶりについて語ることはまずなく、酒席でそうした話になっても冷酒を片手に「コーチに任せてある」と鷹揚おうように返すのが常だった。もっとも、打ち上げの席で若手指導者のベンチワークや審判の姿勢に鋭い指摘が飛ぶことは少なくなかった。

終わりに

中村氏は定年直前に武田薬品を離れ、実家の兼業農家を継ぐ。研究熱心で特にイチゴ栽培に力を入れ、大会の度に手作りの逸品に舌鼓を打った関係者は多い。

カメラが趣味という思いがけない一面もあった。平成23年2月の周南市での全日本実業団選手権大会は中村氏の最後の公的な場への出席となったが、大会プログラムの表紙を氏の写真が飾っている。勝負の一瞬を切り取った見事なスナップであった。

氏の人柄を、師弟の間柄とも言うべき柳井市在住の田中忠男氏は次のように語っている。



一言で言えば、とにかく先輩は仲間づくりが上手で、人間的に魅力があり、出逢った瞬間から親分子分の関係が出来上がります。何番目かの子分である私は、親分に逆らうことなど考えられず、1983年(S58)に第11回中国実業団選手権大会を、1989年(H01)に第22回日本リーグ(男子)を、2000年(H12)に第33回日本リーグ(男子)をと、手をあげた訳でもないのに(笑)、柳井市で開催させられる羽目となり、成功に向けて昼夜を問わず働いたことが昨日のここのように思い出されます。

また、竹中俊憲氏(笠戸ドック)の後任の実連理事長に私が指名された際、実連がいま果たすことはバスケットボールの県内展開であるとの示唆を受け、バスケットに縁の薄い地域に赴き県実業団リーグ戦の開催を訴えて回りました。幸い、各町村の教育委員会から賛同と積極的な支援をいただき、室津村(上関町)、田布施町、玖珂町、鹿野町等で開催し、先輩の夢を少しでも叶えることができました。……

組織内で多くのことを学び、成長することができたのも、中村幸男氏に出逢えたからこそと感謝の念は尽きません。

—『覚え書き 中村幸男氏を偲んで』～私と故中村幸男氏～から—

「親分子分」は言葉の綾にしても、田中氏の言われるように中村氏の行動力と存在感は目を見張るものがあり、その陰には気さくで懐深い「ユキさん」の人柄を慕う「仲間」の存在があった。盟友とも言うべき畑川育生氏、武田薬品の後輩で中村氏の片腕として活躍した野村保美氏をはじめ、西林弘司氏、平川登氏、島村雅宏氏、西田彰氏、川武修氏など実業団や徳山市協会の面々、当時徳山高校に籍を置いていた佐浦綾男氏を初め徳山商高の田中孝氏など高体連のメンバー、さらに各連盟の有志が氏と歩みを共にし氏を支えた。中でも佐浦氏は、昭和61年の高校総体用務を抱えて多忙を極めていたが、中村幸男氏の人柄にほだされて財務管理等の要諦となる協会用務を引き受けた。その献身に中村氏はことあるごとに謝意を惜しまなかったと聞く。



武田薬品の仲間（田中忠男氏提供）

中村氏はリーダーシップとともにパートナーシップにも満ちていた。日本リーグ大会は多様な裏方業務に支えられて成り立つ。駐車場係にしても、選手のアシストやリバウンド数などを記録するサブ・スコアシート係にしても、欠かせぬ縁の下の力持ちである。中村氏は、運営責任者として多忙な中でもそうした一人一人にねぎらいの言葉を忘れなかった。その心配りがあればこそ、周囲が一丸となって氏を盛り立てたに違いない。

昭和21年誕生の県バスケットボール協会は、もうすぐ喜寿を迎える。黎明期、草創期れいめいはもちろん、充実期にあって活躍された先達の中にすら早くも鬼籍に入られた方がある。今、衷心から御冥福をお祈りしつつ、諸先輩の競技にかける熱意と斯道発展への願いを引き継ぐことが残された者の責務だろうと改めて心している。

[文責：顕彰事業委員会]